Peopele-managed relief and rehabilitation から Part 1 のみ和訳
（Part 2, 3 は現在和訳中）　　By Aine Nakamura
赤字は下川の主観によるもの

被災者自身による救援と復興活動：

タイ・パンガー県に設置された
バン・ムアン津波被災者キャンプにおける
救援及び再建プロセス
～2005年1月8～9日　CODI チームによるプーケット及び
パンガー県の訪問に同行したトムによる報告書～

本報告書は3部から構成される。

1. バン・ムアンでの大規模な被災者キャンプについての報告
   キャンプは、津波によって被害を受けた人々自身で運営されている。
2. 1月8日にバン・ムアンキャンプにて開催された CODI's Tsunami Relief and Rehabilitation Strategy Meeting についての報告
3. パンガー、プーケット、及びその他の被害地域における津波後の全般的な状況についての報告

12 月 26 日、巨大な津波はタイ西部の海岸に押し寄せ、6 県の地域に被害をもたらした。ピピ島及びプーケット島のメジャーな観光地域やリゾート、並びにクラビー県やパンガー県の海岸に加えて、タイ・アンダマン諸島の約（736）漁村及び貧困階級層のコミュニティが壊滅状態となった。住宅はつぶれ、漁船は破壊された。数分のうちに景色が変貌してしまった。津波によって亡くなった人々の集計数は、何千にのぼっている。

津波発生から 48 時間のうちに、the Community Organizations Development Institute (CODI)は、支援スタッフを動員し、住居を失った被災者達を組織化し、状況を調査し、且つ被災者による復興計画をサポートする目的で、コミュニティ・ネットワーク及びタイ南部の市民団体、救援団体、地域の自治体、並びに資金援助団体との協力体制を取った。

その初期段階で、被災者の為のキャンプ地及び仮設住宅の建設が最も緊急に必要であることが明確になった。（目的：被災者に必要な物資を提供する、危機的状況にある人々への精神的なサポートをする、キャンプ地での仮設住宅建設の為の被災者自身による計画に協力する、現時点のニーズ及び将来的な復興の為の体系作りを行う、数々の救援団体の中心的役割を担い、各団体が専門とする救援活動（応急処置、寄付、食料、行方不明者調査の為の情報センターの設置等）の提供をスムーズにする）

数日の間に、地元及び海外の支援団体、軍隊、政府の社会開発局及び災害支援局（Disaster Relief Department）、並びに CODI による支援が結集し、アンダマン諸島の海岸沿いに、各団体によってキャンプ地が複数建設された。最も被害を受けた地域（パンガー県）にて、CODI は、他団体との協力の下、前文に記載したキャンプ地のうち 3 つのキャンプを運営している。2005 年 1 月 8～9 日、ACHR のトム・カール氏は、CODI バンコク事務所のチームに参加し、パンガー県のキャンプへのワーキング・トリップに動向した。下記は、同氏による当該地域の報告である。

第1部　バン･ムアンの復興キャンプ

タクアパ地域のバン･ムアンの被災者キャンプは、タイ南部のアンダマン諸島沿岸で津波の被害にあった人々に対して避難所及び救援物資の提供の為に設置された数々の被災者キャンプの中でも、最大規模である。CODI は、当該キャンプを建設する上で、区、バン･ナム･ケン村長、及び経済産業省と緊密な連携体制を取った。そして当該キャンプは、鉱業･産業局（Mining and Industries Department）の管轄地に建設された（バン･ムアン区事務所の隣）。当初は、約 400 の家族を収容する計画であったが、現在（2005 年 1 月 8 日付）キャンプには既に 850 の家族（3500 人）が登録し生活している。

CODI　救援活動本部:　　バン･ムアン　キャンプは、被災地 6 県における CODI 救援･復興活動の連携本部としての役割も果たしている。キャンプ本部では、複数のコンピュータ、ファックス機及びコピー機が設置されており、且つ高速のインターネット接続も可能であり、6 県における津波被害の集計や救援活動の調整等を実施する上でのコミュニケーションの場として機能している。バンコクとの電話及びインターネット接続は、大変良好である。とても整備された環境である。

*コミュニティ･プラニング･ネットワーク*とは、タイ南部の最も活動的なコミュニティ･ネットワークの一つである。本部は、タイ南部のシャム湾側に位置するナコンシータマラートの Mairieng 副地区に所在する。コミュニティ･プラニング･ネットワークは、バン･ムアンのキャンプについて情報を得て、すぐに当該キャンプの建設の為に大人数の人材を動員し、仮設住宅の建設を実施した。コミュニティ･プラニング･ネットワークでは各メンバー（コミュニティ）に 3 名のボランティアの確保を要請したが、ほとんどのコミュニティが 6～7 名の人材（身体の大きい農業従事者や大工等）を送り出したため、当初予定では小規模な団体のはずであったボランティアチームが軍隊規模になった。ボランティア達は、それぞれが自分用のテントを持参し、キャンプ地にて津波の被災者の側で宿営している。今週末、タイ南部のその他の地域から結集したコミュニティボランティア 100 名以上が当該地域に来て家の建設を支援する。***上記のような「水平型」、「人と人とが手を取り合った」支援は、バン･ムアン　キャンプの特徴である。***

57　の支援団体による協力:　テント及び簡易トイレ、風呂、調理場、並びに医療設備の建設は 12 月 29 日に開始し、バン･ムアン　キャンプは、1 月 1 日にオープンした。それ以来、驚くほど多くの団体（現在のところ、57 団体）が、キャンプに暮らす人々への支援を様々な方法で実施している。前文記載の団体には、医療支援団体、数カ国のボランティアの医師及び保険専門家によって構成されるチーム、子どもによる団体、災害カウンセラー、女性支援団体、日本の若者によるボランティア、地元及び世界各国の　NGO、並びにワールド･ビジョン及び国連ハビタットを含む国際的支援団体が含まれる。

支援活動にはとても多くの団体が関わっており、各団体がそれぞれ活動課題及び方法を保持しているので、バン･ムアン　キャンプは、意見の衝突及び口論等で混乱していると考える人もいるであろう。実際のところキャンプは、ほとんど全ての面において、専門的に見ても順調に、且つユーモアに溢れた場として機能しており、前例が無いほどにまで団体同士が円滑及び友好的に協力し合っている。しかし、何よりも素晴らしいことに、上記のような全ての協力体制が、当該キャンプに滞在する津波被災者自身によって、組織化、管理、及び運営されているのだ。

1 月 6 日、社会開発人間保障省大臣が当該キャンプを訪問した際、大臣はある人に「なぜこんなにも多くの団体が活動しているのですか？」と聞いた。キャンプのオーガナイザー達は、このように答えたという。「*これは大規模な支援活動を組織化する新しい形なのです。この方法によって、被災者が支援団体に圧倒されることなく、多くの団体及び多くの人々が活動の一部を成しているのだと感じることが出来るのです。このような友好的でおおらかな協力は、地域の人々自身がキャンプを組織化することで初めて可能になるのです。*」

キャンプの雰囲気： バン･ムアン　キャンプを訪れる外部者が驚くのは、キャンプの溢れんばかりの活気である。笑顔が溢れ、子ども達が遊び、人々の興奮で満ちていて、カラオケテントまでもある。被災者キャンプというより、まるで村の縁日のようなのだ。子ども達のアクティビティ･テント（Children's Activity Tent）では、30 から 40 人ほどの子どもたちが津波の思い出を表した絵や津波以前に子ども達が住んでいた地域の絵を描いていて、ソーシャル･ワーカーがその子ども達の周りに座っている。他の子ども達は、紙を切って遊んだり、外に設置されたジャングル･ジムで遊んで叫んだりしている。ドネーション･テントでは、もっと多くの子ども達が寄付された洋服の山で仮装して遊んだりキャーキャー言ったりしている。子ども達の親達は、たくさんの衣服の中からサイズの合う服を選別して探している。そして、コミュニティのラジオ局のようなものが設置されている中央の建物のスピーカーからは、1 日中、様々な告知や情報、仏教徒による詠唱、イスラム教のお祈り等が流れている。

角界の政治家、政府関係者、VIP 達が、黒い窓ガラスのトラックや車の列を成して現れる。ヨーロッパやアジアのテレビ局、新聞及びニュース雑誌の報道チームやリポーター達がキャンプの中をぞろぞろ歩いている。日本からのある撮影チームは、キャンプの PA システムが日本への信号を妨げていた為、システムを一時停止してほしいと苛立って頼んでいた。（彼らは、そう頼むよう上から指示されたようだ。）

一人のオーストラリア男性は、汗をびっしょりかき、赤い顔をして走って来て、誰かタイでモンキースパナを手に入れる方法を教えてほしい、と聞き回っていた。また「U-Turn for Christ」と書かれた T シャツを着たある外国人は、メールを送信したいと頼んでいた。

食事は美味： タイが世界の料理のホットスポットとして注目されているのには理由がある。バン･ムアンの被災者キャンプにはその証拠がある。「救命食料」などは食べないほうが良い。人々は、津波で生活や住居を壊された後にも拘らず、今まで食べたことのないようなご馳走を手早く作っている。*キャンプにいればどこにでも食べ物があるのだ！*細長いテントのいくつかでは、女性も男性もにぎやかに 1 日中食事の準備をしている。そこには、何杯分もの蒸しご飯がプラスチックの中華料理用スプーンと一緒にきれいにパックされていて、その隣には、迷ってしまうほどたくさんの種類のカレー、繊細な味のするスープ、野菜、香辛料の効いた魚肉だんごのフライ、そしてあらゆる種類の調味料が並べられていて、ご飯と一緒に小さなビニールバッグに入れて持っていけるようになっている。まるで、バンコク一のフード･マーケットのようだが、ここでは全ての料理が無料なのだ。ターメリックが散らされたタイ南部独特の酸味の効いたカレー（*Gaeng*）はとろけるような味だ。プーケット独特の美味しい目玉焼き添えヌードル、非常に辛い魚ソースの *kanom cheen* 素麺等もある。ヘルシーで美味しい愛のこもった食事が十分なほど用意されていて、絶望と喪失で苦しむ人々の場だとは到底考えられないほどである。歩いている人みんなが、何か食べ物を持っている。これこそが生きることの力を現していて、大切なことなのである。

「私はこれまで様々な難民キャンプを訪れました。スーダン、ボスニア、ルワンダ、カンボジアのキャンプ等です。しかし、このキャンプほど清潔なキャンプを見たことがありません。どこにもゴミが散らかっていません。どういうことなのでしょうか？しかもみんなが同時にパッタイを作っているかのごとく、とても良い香りがするのです。」
（ドナ・レインワンド（Donna Leinwand）は、ワシントンに拠点のある新聞のユースリポーターである。USA-TODAY）

眠れない夜　亡霊の恐怖： 日中のキャンプの活気に溢れたカーニバルのような雰囲気は、夜になると一変する。テントや仮設住宅に暮らす人々は、不眠に悩み、愛する人を失った悲しみや津波に襲われた時の恐ろしい思い出で心がいっぱいになってしまう。ここに住むある家族は、30 人もの親戚を失った。夜にはキャンプの住居人の 3 分の 1 の人々が眠れず起きていて、語り合っていたり、ブラブラ歩き回ったり、テントの外で座ったりしている、とネットワークのある幹部は話してくれた。彼らはまだ深く取り乱していて恐怖に襲われている、この場所は今亡霊でいっぱいなのだと、彼は語った。何人かの精神科医が、キャンプ内にトラウマ対処カウンセリングセンターを開設している。また、コミュニティ・ネットワークのボランティア達は、シンプルなセラピーを提供している（真夜中に、彼らと一緒にいてあげたり、彼らが話したければその話に耳を傾けてあげたりする）。

行方不明者の捜索： レセプション・センターには、毎日取り乱した様子の家族達が行方不明になっている娘や息子や祖父の写った擦り切れた写真を手に、目撃情報を求めてやって来る。地元の家族もいれば、エビ養殖場で労働者として又はリゾートのホテルスタッフとして働いていた親族を捜し求めてタイ南部以外の場所からやって来る人々もいる。バン・ムアンでは、行方不明者捜索の為の特別な委員会、そして行方不明者についての情報を交換出来る掲示板を設置した。「行方不明」とは公に使用されている言葉だが、現在では、未だに行方が不明な人々は亡くなっている可能性が高い。数日前、バンコク・ポスト（Bangkok Post）は、報告された行方不明者と身元不明の死体の数は日々近づいている、と報道した。

被災者自身で運営されているキャンプ： バン・ムアンキャンプに特異的なのは、そこに住む津波被災者自身で運営されているということである。キャンプがオープンした直後から、CODI の中部及び南部事務局からのコミュニティ・ワーカー、NGO、並びにタイ南部のコミュニティのリーダー達が、トラウマを抱えた人々と緊密に協力し始め、キャンプであらゆる活動を共に運営した。キャンプをゾーン毎に分ける作業から始まった。そして各ゾーンは 3 グループ（各グループは 10 家族で構成される。）に分けられた。グループ・リーダー達とゾーン・リーダー達は、毎晩集まり、医療、津波で失った身元証明書及び身元確認書の記録、公衆衛生、キャンプの衛生状態、コミュニティのラジオ等について話し合っている。

秘密は持たず、噂はしない：バン・ムアンの夜の会議：
毎晩 9 時になると、重要事項を話し合ったり、告知をしたり、キャンプの運営に様々な分野から携わる各委員会が報告をしたりする目的で（寄付（衣服、金銭、食料、薬品、玩具、道具）、医療、集計・測量、子ども達の活動、仮説住宅建設、身元確認、キャンプへの新規入居人の登録等について）、キャンプのコミュニティ会議が開催される。我々が訪問をした前日の夜は、例えば、ある仮設住宅の建設完了に当たり、誰がその仮設住宅に移動するかという大規模な話し合いが行われた。全員の賛成により、子どもを多く抱えた家族、お年寄り、及び病人又は怪我をした人々に優先権を与える、という決定がなされた。全ての人が何が起こっているのかを知り、今後の一切の計画及びキャンプの運営に関する決定が、全員の賛成によっ

て公にされることが、前提条件になっている。我々が訪問した夜の会議では、いくつかの委員会が以下のような発表をした。

- **ドネーション委員会**は、誰かいくらの献金、どのくらいの衣服、食料、建設材料、薬品、玩具等をその日に寄付してくれたについて詳細な図を発表した。かかる図は、キャンプ内で誰でも見ることが可能な中央の運営事務所に貼られた。
- **仮設住宅委員会**は、その日の仮設住宅建設の進行具合、これまでに人々が移り住んだ仮設住宅の棟数（前夜の会議で定めた基準に基づく移動）、入居可能な仮設住宅の棟数、明日までに作業終了予定の仮設住宅の棟数等について発表した。労働力についてはタイ全土からコミュニティ・ボランティアが集結している為に問題がないが、物品納入については問題があるという。津波の被害を受けなかった地域での方が価格が低いので、建設材料をかかる地域で注文し納入する必要があるかもしれない。
- **トイレ委員会**は、男性用トイレのうち詰まってしまったトイレについての問題をどう対処すべきか、という話し合いの場を作った。
- **レセプション委員会**は、その日にキャンプに移り住んだ人々の数、その日にキャンプを訪問した団体、政治家、政府機関、及び報道関係者について報告した。
- **クッキング・チーム**（タイ南部の津波の被害を受けていないコミュニティ・ネットワークの女性達 10 名で構成される。）は、オープンから 8 日間キャンプで料理の担当をしたが、この会議の翌日それぞれ自宅に帰る為、キャンプ居住者の中から 10 名のボランティアを募集し、担当を引き継ぎたいと告知をした。（すると 10 名ではなく 15 名が志願した！）
- **技術委員会**は、発電機の不具合について報告した。また、清水タンクが空になったら確実に交換されることを確認する目的で村長及び副地区と連携するボランティアのチームを結成した。

このキャンプの被災者達は、誰一人として受動的ではない。：
協力することの重要性：
「このような一時的キャンプの最も重要なポイントは、バン・ナム・ケンの一切の津波被災者が一堂に集まることで、数々の緊急支援活動の中で彼らが共に過ごし、語り合い、新たにまとまり、様々な方法で団結し始め、且つ、スタート地点から共に協力し合うことにある。彼らが彼ら自身で動けば、バン・ムアンキャンプのように大規模な支援キャンプの運営に関わる全ての活動が、信頼を構築し、組織技術を付け、トラウマを抱えるコミュニティを団結させ、且つ、仕事や協力を通して彼ら自身の自信を取り戻す良い機会になる。上記のような活動は、彼らが自分達のコミュニティの復興に向けて計画を練り着手する為、及び安定した長期的土地保有を求めて交渉する為に総力を挙げる上での最適な準備でもある。このような方法で、支援活動そのものが協力体制を構築し、かかる協力によって、コミュニティを復興し、荒廃した生活そして文化を取り戻すという長期的な責務に取り掛かれるのであろう。」

ピクン氏は、キャンプのインフォメーション・センターで働くタイ英通訳のボランティアである。彼女は、13 年間、ビルマとカンボジアの境界に位置するタイの難民キャンプで働き、多くの失望を体感してきた。しかしこのバン・ムアンで、彼女は「ここのいる人々は誰一人として受動的な犠牲者ではなく、活動的で意欲的なサバイバー（生存者）なのです。」と語っている。

重要課題：仮設住宅：

テントとは別に、津波被災者が、復興プロセスが進展してゆく間居住することが出来るように仮設住宅が建設されていて、キャンプ内で激しい建設工事が行われている。当該仮設住宅は列を成してとてもシンプルに建設されている。骨組みはゴムの木の棒で、壁はベニヤ板又はファイバー・セメント・パネルで、屋根は波形のブリキ板で作られ、窓の関節にベニヤ板が設置され、いくつかの住宅には地元の納入業者から寄付された装飾的なドアが付けられている。

上記の住宅を建設する為に、労働力、材料、更には図面を提供するグループもある。被害を受けた数地域では、多くの団体や政府機関が関与し、仮設住宅について混乱が起きている。しかしバン・ムアンでは、異なる団体がキャンプでそれぞれ担当を持ち、良好に協力しているようである。タイ国軍がある一組のセットを作り、ワールド・ビジョン支援機関がまたある部分を建設し、一方で、タイ南部で強力なネットワークを持つコミュニティ・ネットワークのボランティアが住宅の大部分を建設している。

- **CODI が資金提供をしている仮設住宅**は、コミュニティ・ネットワークにより建設されていて、一棟当たり、12~15,000 バーツ（300~375 米ドル）の費用がかかっている（「安すぎる！」と反対している人もいれば、「高すぎる！」と反対している人もいる。）。
- **国軍による仮設住宅**は（私には上記の住宅と変わらないように見えるのだが）、1 棟当たり、50,000 バーツ（1,250 米ドル）の費用がかかっている（みんなが「高すぎる！」と言っている）。政府による津波支援活動の一環として、タイ国軍に与えられた主要な責務の一つが、被災地域で人々の為に仮設住宅を建設することであった。しかし、多くの部門や管轄が存在していることにより、活動プロセスは非建設的であった。バン・ムアンに、キャンプオープンの翌日から住宅建設の為に多くの兵隊達が運ばれた。だが、3 日活動した後、全ての兵隊達が跡形もなく消えてしまった。誰もその理由を知らない。そこで、キャンプの住民達が、自分達で建設工事を引き継ぎ、多くの住宅の建設を完了させた。
- **ワールド・ビジョンによる仮設住宅**は、世界中で災害時に採用する厳格な基準モデル（4×6 メートル、全て波形のブリキ板で作られている。）に基づいて建設された。壁にもブリキ板を使用することに関して（「オーブンのような状態になる！」「屋根に使う材料だ、壁用ではない！」等と）タイの人々から反対があり、ワールド・ビジョンのスタッフは、ブリキ板が提供されると把握している寄付者達から不正行為だと非難されるかもしれないと、途方に暮れ、材料を変えることに対してはなかなか同意しなかった。最終的には、妥協に至り、壁の材料として、ファイバー・セメント・パネルが使用されることになった。

誰が仮設住宅の入居権利を保有するのか？　上記の仮設住宅を家族達に割り当てる過程の中で、土地の権利をめぐる重大な問題が、既に浮上してきている。キャンプを訪問した政府の役人の何人かは、被害を受けた地域に住んでいた人々のうち正当な土地の権利を保有していなかった家族が、上記の仮設住宅に入居スペースを与えられることに関して、懸念を示していた。この視点については、CODI 及びキャンプのコミュニティ・リーダー達が明確にしている。**仮設住宅は、津波以前の土地の所有状況の如何に拘わらず、津波の被害を受けた全ての人々が対象となっている。**ある CODI のスタッフは、政府から多くの資金補助を受けている低所得者向け住宅プログラム *Baan Eua Arthoen* には、階級や所得に拘わらず誰もが申請可能である、とも指摘した。

解決策：被災した各村用に仮設住宅を即座にオープンする。

その理由：災害後にばらばらに離れてしまった人々が集まれるように。人々が離れ離れになっていると、気力を失ってしまい、課題事項について話し合い同意することも出来ない。バン・ムアン　キャンプのように同じ場所に集まって初めて、被災者達は、結集し、論じ合い、計画を立て、優先事項を決定し、且つ将来について*皆が賛同する*ビジョンを描くことが出来る。各コミュニティは、可能な限り早く**再構築**する必要がある。上記の理由により、人々が帰って来れる場を提供する仮設住宅を、人々を集結させる為に**即座に**建設する必要があるのだ。テントから提供することから始め、次に、テント住居人がテントから住宅に移り住み他の人々がテントに住めるよう、出来る限り早く仮設住宅を建設しなければならない。***CODI は、これまでに、仮設住宅の建設に関わるコミュニティ・ネットワーク及び市民団体を 4 つのキャンプ（バン・ムアン及び他の 3 つのキャンプ）に動員した。***

バン・ナム・ケン村：

バン・ムアン　キャンプに住む人々の多くが、1,600 世帯、登録人口 4,600 名の海辺の大きな漁村（かつては、スズ鉱業の村であった。）であるバン・ナム・ケンからやって来ている。生存者の推測によれば、他に 1,500 名ほどの不法滞在者が住んでいたという。彼らのほとんどは、インフォーマル・セクターの漁業労働者で、タイ北部やビルマからやって来て働いていた。彼らを加えると、津波以前には 6,100 名ほどの人々が、バン・ナム・ケンに暮らしていた。かかる不法滞在者については消息が不明である。何名かのビルマ人の生存者達はビルマに強制送還されてしまったし、他の人々もタイ政府による強制送還から逃れる為隠れているので、彼らについての情報を収集することは困難である。一方で、不法労働者達の家族や友人は、強制退去させられることへの恐怖から、自分の友人や親族の消息を確認する為にお寺（wat）（地域の仏教寺院では、死体の身元確認が行われ、火葬場も設置された。）を訪れることに消極的である。

バン・ナム・ケンは、津波によって被災したパンガー県の中でも最も激しい被害を受けた村の一つである。村のほとんどの住宅、漁船、及び魚加工用の機械等は破壊された。村のほとんどの地域には、砕けた道路くらいしか残っていない。多くの破片等は既に政府のブルドーザーによって一掃された。また、あちらこちらでスカベンジャー（ゴミを拾い、売ったりする人々）が、アルミニウム、鋼鉄、木材等の破片を海岸沿いの引き上げ作業場に運ぶ為に荷車やトラックに積んでいる。

1 月 10 日現在、バン・ナム・ケンの身元確認済の死者数は、825 名に上っている。だが、現在でも多数の人々が行方不明な為、死者数は今後も急激に増加する見込みである。津波発生後、何名かの生存者は近くの寺院に避難した。また、親戚の家に向かった生存者もいた。しかし、多くは、最終的にバン・ムアンの被災者キャンプにやって来た。これらの生存者達は、全ての物（家、愛する人、生活等）を失っている。

バン・ナム・ケンに暮らしていた家族達の**永住権に関する状況**は、非常に複雑である（津波の被害を受けた海岸沿いの地域のほとんどが、同様の状況である。）。スズ鉱業に関わっていた頃から土地所有権証明書を保持していた家族もいるが、ほとんどの家族は 20 年以上或いは 1 世紀にわたってバン・ナム・ケンに居住していても、そのような証明書を一切保持していない。

地図作製：　バン・ムアンのキャンプでは、現在、緊急の活動として津波以前の集落の地図を作製している。建築家及び CODI が、人々と協力し、誰がどこに誰の隣に住んでいたか、誰がどの程度の土地を保有していたか等を記録する為に、以前の町並みを区画毎に作図している。津波が全ての町を一掃してしまったので、この大まかな地図が、今後の復興計画の際に重要なベースになる。